

東京言語研究所 2025 年度春期講座

		講義概要(講師名・所属)
1日目 4月12日 (土)	1限	日本語文法理論 発話の現場に根ざした文法 (定延利之・京都大学教授)
		<p>伝統的な言語学では、言語は「脱-現場的なもの」と考えられてきました。たとえば、いま、ここにあるリンゴだけでなく、以前に見かけたリンゴ、今度買うかもしれないリンゴ、白雪姫が食べたリンゴなど、すべて「リンゴ」と言うことができます。「リンゴ」ということばは確かに、特定の現場に限られない「脱-現場的なもの」に見えます。</p> <p>しかしそれでも言語の基本は、いま、ここに現実にある発話の現場、そしてコミュニケーションの現場なのだ、というのがこの講義の核となる考えです。</p> <p>こう考えれば、日本語の文法のさまざまな謎を解明する道が見えてきます。</p> <p>アンケート調査の結果を踏まえて、現場に根ざした文法システムについてお話ししたいと思います。</p>
		言語類型論 言葉のフィールドワーク入門 (長屋尚典・東京大学准教授)
	2限	<p>この講義では、言語研究の基礎となる言語学におけるフィールドワークの初歩を学びます。フィールド言語学は、広く定義すると「ある言語をその言語が話されている自然な環境で研究する方法」のことです。100年以上の歴史を持つ確立された方法論であると同時に、現在、言語学で最も活発な分野の一つです。アメリカの大学院では言語学における必須のトレーニングの一つと考えられており、今年度私が担当する講座「言語類型論」の基礎ともなっています。</p> <p>春期講座ではそのフィールド言語学の全体像の導入を行います。扱う主なテーマは、フィールドワークの定義、目的、歴史、調査方法、分析手法、成果発表、言語ドキュメンテーション、研究倫理などです。「母語以外の言語を研究してみたいがどうすればいいの?」「言語学者は世界の少数言語をどのように記述しているの?」「フィールドワークするためには何を勉強すればいいの?」「どんな本を読めばいいの?」春期講座では、そのような疑問に対する答えを探っていききたいと思います。</p>
		社会言語学 社会言語学への入門 (朝日祥之・国立国語研究所教授)
		<p>社会言語学は「ことばと社会」の関係を扱う研究分野です。初対面の人、家族、自分とは異なる言語を使う人と話す時に使う言葉はそれぞれ異なります。会話をする場の状況、相手、その言語背景によって「ことば」の使い方が変わります。社会言語学は、そのメカニズムに迫っていきます。授業では、社会言語学がどのように誕生、発展したのか、研究テーマがどのように設定されてきたのか、調査方法がどのように開発されていったのかについて、説明していきます。これから大学の卒業論文や大学院の進学に向けた準備をしている人、自分の関心をどのように社会言語学の研究テーマとして育てていけばいいか模索している人などを社会言語学的にことばを見つめる方法をお伝えできればと思っています。異なる言語や方言、手話、敬語の使い方、多言語使用、ことばの権利、国語施策・日本語施策などと聞いて何かありそうと思う方とともに社会言語学の世界へご案内いたします。</p>
認知言語学 フレーム・スキーマ・メタファー (大堀壽夫・慶應義塾大学教授)		
<p>ことばの運用には、形についての知識と、形と意味の対応についての知識が関わってきます。例えば「就職難民」という表現を考えてみましょう。名詞を二つ結合する場合、それが全体として表すのは第二の部分が指すもの、この場合「難民」です。これは構造上の主要部です。では「就職」と「難民」の間の意味的な関係は何でしょうか? それは「パレスティナ難民」や「経済難民」などの表現において、構成要素である二つの名詞の間に成り立つ関係とどこまで共通しているのでしょうか? 認知言語学では、特に形を手がかりとした意味の解釈プロセスに注目します。「〇〇+難民」の場合、形からの手がかりはきわめて限定的です。意味解釈にとって重要な要素の一つは、「難民」という部分が喚起する典型的な場面についての知識、すなわちフレームです。もう一つは、そうした知識を「〇〇」の部分と照応させてアドホックな状況を想像する能力です。講義ではより多くの例を取り上げて、フレーム、スキーマ、メタファーといった認知言語学の基本的な考え方を導入します。その上で、発展的なトピックとして、COVID-19 状況下における「メタファーという病」についても考察します。</p>		

	3限	<p>実験音声学 (田嶋圭一・法政大学教授)</p> <p>実験音声学とは、音声を科学的に捉えるために実験的手法を用いて音声データを測定・分析する音声学の一分野です。本講義では、この実験音声学という分野について、講義を2つのパートに分けて概観する予定です。講義の前半では、この分野の全体像をつかむため、実験音声学の主要な研究領域のいくつかを取り上げます。音声の物理的特徴の分析、話し手による音声生成の生理的メカニズム、聞き手による音声の知覚と認知、母国語や外国語の音声の発達や学習、音声の方言差や時間的変化などについて、具体的な研究例を交えながら紹介する予定です。講義の後半では、実験音声学の領域で頻りに利用されるPraatというフリーの音声分析ソフトを用いて、この分野の主な研究手法のいくつかについて説明します。具体的には、(1) 音声を可視化して物理的特徴を測定・分析する方法、(2) 音声のピッチなどの特徴を人工的に操作した合成音声を作成する方法、(3) 音声を刺激材料として呈示する知覚実験の実例などを、Praatの操作画面を実際に示しながら紹介する予定です。このような内容を通して、話し言葉を自分の目と耳で客観的に観察する面白さを共有できればと思います。</p> <p>意味論 意味論への招待 (酒井智宏・早稲田大学教授)</p> <p>意味論は理論言語学の中で一番とつきやすい分野に見えて実は一番とつきにくい分野です。その理由の一つは意味がどこにあるかわからないことです。音と単語と統語構造は、簡単にとはいえませんが、がんばればある程度観察することができそうですし(音韻論・音声学、形態論、統語論)、言語の使用は確実に観察することができます(語用論)。これに対して、「水」や「私」という語の「発音」でも「構造」でも「使用」でもなく、ただ「意味」を観察せよと言われても、どこを観察すればよいのかよくわかりません。意味は心の中にあると言われるかもしれませんが、では苦しみはどこにあるのでしょうか。その人の心の中にあると言いたくなります。苦しみと意味は同じところにあるのでしょうか。「苦しみのやりとり」は難しい気がしますが、「意味のやりとり」は日常的に行われているように思われます。すなわち意味は心の中にありながらも他者と共有することができるという二重性をもっているように思われます。春期講座では「意味の共有」という現象の一端に迫りたいと思います。</p>
	4限	<p>音韻論 音楽と言葉の関係 (窪園晴夫・国立国語研究所客員教授)</p> <p>後期に開講される「音韻論」では、一般言語学の視点から日本語と英語の音韻構造の異同を考察します。今回はその講義のイントロとして、テキストセッティング(text setting)という観点から音楽と言葉の関係を考察し、そこに見られる日英語の共通点と相違点を分析してみたいと思います。テキストセッティングには、先に作られた歌詞に楽譜(音符)が割り振られるタイプと、それとは逆に、楽譜が先に作られ、そこに歌詞(単語)が割り振られるタイプがあります。前者から見えてくるのはその言語におけるモーラと音節の役割です。一方、後者から見えてくるのは語を二分あるいは三分する際の分節様式であり、そのプロセスに対するアクセントや形態構造の影響です。これらの問題をかいつまんで解説し、時間に余裕があれば、歌の分析から見えてくる音節構造の諸問題—二重母音の特定や超重音節の有標性など—にも言及してみたいと思います。</p> <p>生成文法 I (平岩健・明治学院大学教授)</p> <p>私たちが普段使っている自然言語では意識的に認知できるのは意味形式と音声形式(手話言語の場合はジェスチャー)の二つです。どの言語でも辞書には音声と意味がペアで表記される形式になっているのはまさにそのためです。では自然言語のシステムは意味と音声だけで構成されているのでしょうか？生成文法理論の重要な知見の一つは自然言語の文は単語同士の結合が文法原理に基づき回帰的に適用されることで生成されていることを発見し、文においては意味と音声/ジェスチャーが直接的にペアリングされているのではなく、二つは目や耳では認知できない「統語構造」を介してペアリングしていることを明らかにしたことです。</p> <p>この講座ではまず生成文法理論の中心的な考え方を簡潔に可能な限りわかりやすく概観したのち、構造が存在する証拠として構造的な多義性と日本語・英語・沖縄語の省略表現のデータを取り上げながら自然言語における統語構造の重要性を具体的に紹介したいと思います。</p>

2日目 4月13日 (日)	1限	<p>史的言語学 同系性の原理と規則性の原理</p> <p>(吉田和彦・京都産業大学客員教授)</p> <p>言語学の科学としての存立をはじめて確かなものにした分野は史的言語学(歴史言語学)でした。20世紀に構造主義言語学、さらに生成文法が到来する以前に、ライプツィヒにおいて歴史比較言語学の研究を進めていた「青年文法学派」というグループのひとりであったアウグスト・レスキーンは1876年につぎのように述べています——言語学があらゆる科学のなかでひとつの地位を得るためには、動機づけのない恣意的な音法則を排除しなければならない——。彼らの研究を推進する原動力になったのは、諸言語の膨大な資料に対して適用される、規則性の原理に支えられた厳密な方法論の確立でした。この授業では、史的言語学における規則性の原理とはどのようなものであるかを、具体的な言語データに基づいて考えます。なお、2025年度理論言語学講座の前期において「史的言語学」を担当します。この授業では、史的言語学のいくつかの方法論について解説したあと、その方法論を諸言語のデータに適用しながら、実際の言語分析を行います。この分析作業により、受講生のみなさんの問題発見能力と問題解決能力が涵養されます。</p>
		<p>生成文法Ⅱ</p> <p>(宮川繁・マサチューセッツ工科大学名誉教授)</p> <p>言語は人間独自の特性です。他の生物には近いものはありません。言語のさまざまな特徴の中で、構文は特に注目に値し、非常に複雑な構造を構築できる方法が際立っています。深く見ると、構造構築に関与する特性は豊かで規則的であり、場合によっては神秘的さえあり、時には難解です。この講義では、人間の言語が鳥の歌やサルの鳴き声などのシステムとどのように異なるかを説明し、その上、一致(アグリーメント)、移動、アプリカティブ(applicative)など、いくつかの構文の特性について観察します。</p>
		<p>認知言語学 同族目的・生成の動詞・「なる」</p> <p>(池上嘉彦・東京大学名誉教授)</p> <p>文法で<同族目的>(cognate object)と呼ばれる構文があります。この構文で、動詞と目的語とによって表される意味関係は何か、と問うことから出発します。そして、それが<生成>(generation: ただし、動詞 generate が直接、名詞化された場合の意味)であることを確認します。その上で、上古の日本語には、一方では、<生成>の過程が(人為の介入なしに)<自然>に進行するものとして受けとめられ、<自動詞>として言語化されるという場合、他方では、<生成>の営みが<人為>の介入により実行されるものとして受けとめられ、<他動詞>として言語化されるという場合、とがあることを確認します。(具体的には、前者では自動詞「ナル」(cf.「実ガナル」)、後者では、他動詞「ツクル」(cf.「八重垣ツクル」)がそれぞれ当てられます。)その上で、この両者の間の中間帯の「ナル」に近い部分に自動詞「生マル」(現在の「生マレル」)、「ツクル」に近い部分に他動詞「生ム」という構図が成立します。(自/他動詞の組合せが、二組も参与していることに注目。)そのような位置づけにあって、上古以降、動詞「なる」にどのような変移が生じて来たのか、その「なれの果て」を探ってみます。</p>
	2限	<p>語用論 誤解が生まれてしまうのはなぜ?</p> <p>(松井智子・中央大学教授)</p> <p>毎日の会話を通して、相手にうまく伝わらなかったなと思ったり、言い方を間違ったなと後悔したりしたことはありませんか。また後で振り返ってみると、相手が言ったことを誤解していたかとも思い当たることがあるかもしれません。語用論では、こうしたコミュニケーションの失敗がなぜ起こってしまうのか、説明しようとしています。会話で使われる言葉の意味を解釈するとき、また会話の中で言葉になっていないメッセージを汲み取るとき、私たちは言葉の意味を解釈すると同時に、話し手の「意図」や「態度」といった、目には見えない心の状態を推し量ることになります。ただし、誰もが経験することですが、私たちにとって、相手の心を正確に読むことは難しく、誤解につながることも少なくありません。この講義では、関連性理論の考え方を学びながら、なぜ私たちのコミュニケーションにおいて誤解が生まれるのか検討することで、後期の理論言語学講座で取り上げる内容の導入とします。</p>

	3限	<p>調音音声学 (中川裕・東京外国語大学教授)</p> <p>春期講座では、2025年度前期開講の「調音音声学」で扱う内容に触れながら、音声学の基礎知識・技能を身につけるための要領を講義します。伝統的に調音音声学の授業では、発音器官の模式図を用いながら「内省」と呼ばれる主観的観察の訓練をしますが、同時に、それを補うための客観的な器械音声学的・実験(室)音声学的な調音的観測の資料も利用します。今回の講座では、母音の狭広・前奥、破裂音の調音点(歯茎・そり舌・軟口蓋・口蓋垂)を具体例として、それらの内省方法の勘所を解説します。さらに、関連する客観的観察(パラトグラフィー・唇の動画撮影・MRI撮像・X線撮影)による資料の利用法を紹介します。また、時間に余裕があれば、内省の訓練に役立つ音響的観察の手法についてもお話しする予定です。なお、必須ではありませんが、もし手鏡をお持ちの方は、講義の際に用意しておいてください。</p> <p>日本語文法理論 対照研究と日本語 (井上優・日本大学文理学部教授)</p> <p>言語の対照研究は、複数の言語を「比べて考える」ことにより、それぞれの特性を浮かび上げさせ、最終的にそれぞれを相対化する(公平に見る)視点を見出す研究です。今回の講義では、2025年度後期「日本語文法理論Ⅲ:対照研究と日本語」の紹介をかねて、日本語と中国語のコミュニケーションを例に、対照研究のものの見方・考え方についてお話しします。一例をあげれば、日本語では「先日はありがとうございました」という発話をあいさつのように使いますが、中国語ではふつうはこのような発話はしません。この違いは、日本語で「先日はありがとうございました」のように言う理由を考えるだけでは、また、中国語でそのように言わない理由を考えるだけでは、説明ができません。日本語と中国語の両方を相対化できる(公平に見ることができる)見方を考える必要があります。この例に限らず、他言語と対照することにより日本語に対する理解が深まること、そして、日本語について考えることが他言語について考えることにつながることをお伝えできればと思っています。</p>
	4限	<p>言語心理学 言語の理解を科学する (広瀬友紀・東京大学教授)</p> <p>言語心理学(または心理言語学)とは、言語という知識体系そのものに加え、そ脳内での運用にかかわる人間の認知のしくみのあり方、過程について探求する分野です。言語に関する知識というものがあるとして、それを人間がいかに獲得するのか、そしてそれをどのように使いこなすのか、その際どのような情報を用いることができるのか、ということについて考えていきましょう。そのことにより、私たちが普段当たり前のようにリアルタイムで言葉のやりとりを行っている事実について「人間ってすごい!」とあらためて実感していただけることと思います。本講座では主に、人間の言語理解および産出にかかわる心内の処理について扱います。言語処理にはいくつかの段階がありますが、音声面と統語面の両方について、母語および第二言語も視野にいれつつ、さらに言語間比較研究などについても触れられるような授業にする予定です。時間の許す範囲で実際の研究紹介なども取り入れつつ、言語心理学実験とはどのような発想でデザインされているのかという基本的な約束事なるべく共有できるようにすすめていきたいと思っています。</p>